

始めの中国

日本学術振興会理事長
木田 宏

去る九月、中国社会科学院の招きをうけて、始めて中国の旅をした。もっとも北京には、二年前三日ほど滞在したことがある。しかし、空港、北京飯店、人民大会堂を往復しただけであったから、今回が始めての中国旅行といつてよいであろう。

ちょうど折よく、サイマル出版から、Edgar Snow's China の翻訳、「抗日解放の中国」が贈られていたので、共産革命の流れに目を通した。その時、アメリカと中国兩國は、東西南北の広がりほぼ同じであると知ったが、訪ねてみて肌身に感じる距離感は今と違っていた。

中国は古くからの隣国であつて、成田から四時間足らずで、首都の北京に着いてしまふ。しかし、各地の案内を受けるにつれて、生活感覚としての

尺度には、極めて大きい違いのあることに気がついてきた。とくに時間と距離を克服する人間の営みには、われわれの生活感覚を以てしては到底理解しえないものがあるのではないかと思つた。

北京の西の郊外に、頤和園がある。清朝の「夏の離宮」であつた所と言われる。大きな人工の湖とその湖を掘つて出来た万寿山、そこに建てられた数多くの建造物から成つている。三百年も前に、人力で自然を凌ぐような大きな工事を実施し、第二次アヘン戦争で破壊された後に、清朝の女帝西太后が、その一部を再建したものが今日の姿であるという。料理人だけでも七百人に上つたという生活まで、その構想の大きさ、掛ける時間の長さ、気宇の大きさはとてもわれわれの及ぶところではない。

歴史上世界一の巨大な構造物とされる万里の長城だけではなく、見るもの総てに、途方もない時間と距離とそれを越えるエネルギーの大きさがあり、その大きさに圧倒されるのである。

紀元前十一世紀ごろから、約二千年にわたつて歴代王朝が都を築いた中国一の古都西安。かつて長安と言われたこの唐の都には、紀元前二百二十一年に中国最初の統一王朝を築いた秦の始皇帝の墓があり、それを守るようにして陵の東十キロに配置された兵馬俑の遺跡がある。八千体にも上ると推定される等身大の兵馬の人形を、体育館のような大きな屋根を掛けて、少しずつ手順をふんで掘り進んでいく発掘の作業は、紀元前にそれらの陵を築き、俑を制作して配備した仕事の大きさも忍ばれて、圧倒されるばかりである。

その西安には、六千年前の母系社会とみられる集落の一部が遺跡として発掘保存されている。半坡遺跡の博物館がそれである。これらの遺跡を廻りながら、西暦八百四年から六年にかけて入唐した空海が、恵果から密教の奥義を伝授されたという青龍寺を訪ねてみると、全く昔の面影を残していないためとはいいながら、それほど古い出来事と思えなくなるから不思議である。

こうした古代の中国と現代の中国とがどのように結ばれているのであろうか。各地の歴史博物館では、歴代の王朝が総て最後には農民の反乱、義挙によつて転覆され、遂に今日の政権が人民の政府として誕生したことを説明してくれる。その人民政府の最高機関、國務院と党の首席は、明清二代の五百年にわたる宮殿、故宮博物館の西隣の南海に、ほぼ同じ規模の宮殿を構えて、国政を総てしているのである。為政者の気宇は、昔も今も変わらないのであろう。小さな総理官邸の住人はどのようにに彼等と付き合えばよいのであろうか。

いろいろと思ひ廻らしながら、毛沢東、文化大革命、鄧小平と揺れ動く中国を考えてみると、今日の中国は、尊皇攘夷開國と激動期を乗り越えたわが国の明治初期に似ているようにも思えてくる。

湖南省、四川省から北京に駆け上つた薩長の武士が、攘夷から開國に転じ、互いに競り合いながら、権力の掌握と國威の発揚に辛苦を嘗めていたのである。

人類の発祥から今日までを考えさせる、極めて印象深い中国の旅であつた。